

教育者とアーティストの狭間で - 現代芸術教室「アーティスト」の実践 -

八戸学院大学短期大学部 幼児保育学科 准教授 佐貫 巧

保育者養成校で、保育者の卵に表現（美術系）を教え始め7年経とうとしています。科目に携わる教員が、必ずしも保育所や幼稚園などで保育業務に従事していた経験をもつ教員が担当するとは限りません。保育を学ぶ学生の先にいる子どもとの実践が少ないまま、保育者を養成することは教育の質への弊害になるのではないかと考えました。子どもとの実践的環境を設定し、より深く子どもとの関わりを構築することを目的とし、保育者を養成する教員としての資質向上を確保するために、現代芸術教室「アーティスト」という造形教室を自ら企画運営することに至りました。



現代芸術教室 アーティスト

現代芸術教室「アーティスト」は、青森県八戸市を拠点に3～10歳の子どもを対象とした造形教室です。(2014年度開講)単なる上手い下手ではなく本来持っている発想力を引き出し、創造と表現の楽しみ方を学び『過程』にこそ価値があることを伝えています。現代アートを断定的に捉えることはできませんが、見て考えるという行為によってその人の考え方や価値観を全く別のものに塗り替えること、同意性・批判性を与えること、見た者に考えさせて強い意味性を持たせることなど、発見して考えて楽しむことを学んでいます。

2015年度から、八戸市美術館の教育普及プログラムに起用され「出張アーティスト」として様々なイベントに参加しています。また、2018年度からは、十和田市現代美術館と共にプログラムを展開するなど地域の中でアートに触れる場を作っています。



「オリジナルの額縁で風景を切り取る☆」



「つくって、ぶらさがって、ころがって!? - ミノムシのキモチ -」

八戸マテリアル・アプローチ～あそぶ、こども、あーと～

社会のグローバル化が進み、日本でも21世紀スキルやアクティブ・ラーニングについての議論が盛んになってきています。幼稚園、学校教育の中でも、主体的な学びが求められており、イノベーションを起こせる人材の育成は喫緊な課題です。これからの社会に必要な「表現力やコミュニケーション能力」「探究心」「考える力」を養うためには、幼児期に遊びを通じて能動的な学びが重要です。また、地域との「連携」「連帯」も欠かせないものであり、地域の市民が、子どもの教育のために協力し合うシステムが必要です。「共同で」何かを実行することが子どもたちに学びとして伝わり、協調性や社会性の発達にも繋がるのではないのでしょうか。

このプロジェクトは、八戸圏域の隠れた資源を探し出し、子どもの創作活動の材料として活用するというものです。文化芸術活動による魅力発信に繋げることで、子どもの感性や可能性を最大限に引き出し、アートを通じた創造的な表現の一助となることを目的としました。

実践方法として、様々な企業（店舗や工場・施設）から廃材となった資源をもらい受け、素材を研究し造形活動として発展させます。普段、使用している素材（絵具や粘土など）と組み合わせた活動や、素材から生まれたアイデアをもとに子ども向け創作ワークショップを実施しました。（計12種類・19回開催・延べ約400名の子どもが参加）



[なが〜い紙にゆめをつづろう☆] > ロール紙（三菱製紙株式会社八戸工場）

実践を通して、身の回りに多くの学びの材料が溢れていることに気づく力、それらを主体的に発見する力、伝える力、表現する力が身についていく教育的効果がありました。そして、地域資源の再評価は、八戸の魅力の再評価とイコールであり『まちづくりコミュニティの形成』に貢献できたことが波及効果としてあげられます。循環型の共同体を作り、地域社会で子どもを育むという持続可能な教育を作り上げることが、これからの八戸の課題であると確信しました。

アーティスト活動



「溶解 - 円環するイメージ -」(2014)『第10回大黒屋現代アート公募展』入選

観る者と呼応して現れる『かたち』が、生活の中で感じるイメージや記憶と密接に関わることをテーマとし、絵画を軸に彫刻や写真など様々な媒体に展開。現代アート展「インシデンツ」を企画運営し、アーティストとして国内を中心に多数展覧会に参加しています。



階上町と共同で制作したPRポスター(2015)。「風の人と土の人が出会う場所」というキャッチコピーやコンセプトを考え、町内の巨木をモチーフに神秘的な魅力を表現しました。ポスターの他に、顔出しパネルや駐輪場の壁画制作など地域の活性化に協力。



「八戸ポータルミュージアムはっち」にて開催(2018)

『ハチノヘブルー』をイメージする写真(風景や物など)や言葉(エピソード)を市民から集め、<あお>という視点で八戸を見つめ直すプロジェクト。<あお>をテーマにした自身の作品や、子ども向けのワークショップで制作した作品が空間を彩りました。



南郷アートプロジェクト「物語をあつめる。」という企画でカルタのイラストを担当。八戸市南郷に住む60代~90代から個人や集落にまつわるエピソードを伺い、クリエイターと共に創り上げました。『なんごう小さな芸術祭』(2018)で原画を展示。

アーティストとしては地域資源を題材にした作品を制作し、地元クリエイターとのコラボレーションも多く展開しています。内面からの「表現」と他者との「コミュニケーション」が不可分であること、学生に伝えたいことは、自身が経験から得た実感です。地域の未来を築くのは子どもたち。幼児教育は、地域の未来を描くことと重なります。ならば幼児教育に携わる人材を育成することは、「地域の未来そのものを育てている」と言い換えられはしないでしょうか。

幼児教育と幼児教育者の教育は、地域にとってどちらも重要といえます。地域で学び、地域に還元するというサイクルを教育者とアーティストの視点からこれからも創造していきたいと思っています。

<参考文献>1)「保育をひらく造形表現」植英子 萌文書林 2008年

2)「子どもが絵を描くとき」磯部錦司 一藝社 2006年

3)「驚くべき学びの世界 レッジオエミアの幼児教育」佐藤学(監修),ワタリウム美術館(編集)東京カレンダー 2011年